

令和 4 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03445

研究課題名(和文) 文化的装置としての日本 戦後台湾における集合的記憶の社会的構成に関する研究

研究課題名(英文) Japan as a Cultural Apparatus: Study on the Social Component of the Collective Memory in Post-war Taiwan

研究代表者

林 初梅 (LIN, CHUMEI)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：20609573

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、台湾の対日観が、戦後の歴史的経緯の中で形成されたことを、次の3点に注目して具体的に示したものである。国民党政府の対日政策には、日本的要素の容認と排除という矛盾した両面があり、台湾人の対日感情に大きな影響をもたらした。戦後、経済復興の遅れ、また言語・文化への転換の困難さが、台湾人の対日評価の見直しを促した。日本人引揚者が台湾を再訪して同窓生と交流し、学校記憶が同窓会というネットワークによって維持された。そうした集合的記憶の形成過程があったため、台湾における日本時代の記憶は、戦後政策を背景に更新され、相対化された側面があり、次第に1990年以降の台湾社会へと浸透していった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

旧植民地における日本的要素の残存は、従来帝国主義や植民地主義の影響から論じられることが多かったが、戦後国民党の対日政策との関わりの中で形成された文化的装置としての「日本」の実態を捉えようとしたのが本研究の独自性である。特筆すべきは、研究期間において開催された国際研究集会の論考が『二つの時代を生きた台湾 言語・文化の相克と日本の残照』(三元社、2021)に成果としてまとめられたことである。台湾と日本の関係が、戦後70年を経て日本語世代から非日本語世代へ引き継がれようとしている今日、同書は台湾人にとっても日本人にとっても、自己認識のために重要な問題提起になるものと期待される。

研究成果の概要(英文)：This study shows in detail that Taiwan's view on Japan was formed amidst the historical background of the post-war era, focusing on the following three points: (1) The Kuomintang government's policy towards Japan had contradictory aspects of accepting and excluding Japanese elements, which largely impacted Taiwanese sentiment towards Japan. (2) The post-war delay in economic recovery and difficulty of switching languages and cultures prompted Taiwanese to review their evaluation of Japan. (3) Japanese repatriates revisited Taiwan to interact with alumni and school memories were maintained through a network of alumni associations. Due to the process of forming such collective memory, the memory of the Japanese era in Taiwan was renewed and relativized amidst the background of post-war policy, and gradually pervaded Taiwanese society after 1990.

研究分野：近現代台湾研究、歴史社会学

キーワード：台湾 日本 オーラルヒストリー 集合的記憶 植民地 引揚者 学校 同窓会

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究の発端は、「記憶の装置としての学校—現代台湾における植民地記憶の語りに関する社会学的研究」（基盤研究(C)研究代表者：林初梅、2012年4月～2016年3月、研究課題番号：24510343）という研究に着手したことである。日本統治時代に創設された学校を手掛かりに、台湾における植民地の記憶の変容を研究していく過程で、現在、かなり鮮明に語られる学校をめぐる日本時代の記憶や思い出は、1990年代の台湾社会に突如として出現したものではなく、実は日本的要素が容認されたり、排除されたりしていた戦後初期の社会的状況と深く関わっているのではないかということに気づいた。そして、それと同時に、日本と台湾にまたがる形で存在している同窓会を代表とするような諸集団とその人的ネットワークの存在が不可欠だったのではないか、それらが相互にどのように影響し合って独自の集合的記憶の構築へと向かっていったのか、そこに研究すべき焦点があるように感じるに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究は、脱日本化政策と日本文化の受容という矛盾の中で展開した戦後台湾の社会を考察するものである。台湾遷移後の国民党政府は様々な側面から台湾人の「日本」記憶を抹消しようとしていた。しかし日本色一掃運動の厳しい環境の中でも一部の日本的要素が容認され、残っていた。日本的要素とは、戦前から残存したものもあれば、日本国内で流行っていた大衆文化の流入によって形成されたものもある。いずれも直接或いは間接的に今日の台湾人の日本時代の記憶を蘇らせるものと捉えられる。日本的要素はなぜ容認されたのか、この問いに答えるためには戦後台湾社会の構造変化にも着目する必要があるため、本研究では「日本」をめぐる戦後処理の問題を解明するとともに、それらが今日の台湾における「日本」記憶の形成にどのように作用し、影響を与えてきたかを社会的な様相も踏まえて考察することを目的としている。特に、下記四点の解明を目指す。①日本時代に創設された学校の接収過程、②戦後台湾社会と「日本的なるもの」との再会過程、③日本語、日本文化から異なる言語・文化への転換過程、④同窓会というネットワークによって形成された学校記憶の特徴。

3. 研究の方法

研究方法としては、文献資料とオーラルヒストリーとを相互に検証し、台湾人、台湾引揚日本人の実体験も加えてできるだけ当時の実態や一般的な大衆の状況を明らかにすることを試みた。

具体的に、分担者・所澤潤は、温理仁氏（旧制台北高等学校を継承した台北高級中学卒）へのインタビューを通して台北高等学校と戦後の学校制度との関係性を分析した。また辜振甫氏など台北高等学校出身者の政治的活動を分析して台北高等学校と1990年代台湾の民主化との関係性を考察した。分担者・石井清輝は、①日本植民地統治時代経験者（計23名）に対するライフヒストリー調査、②台北第三高等女学校卒業生による勉強会に参加し、計20回の参与観察調査を行った経験と知見を活かし、「植民地同窓会における戦後日本の台湾記憶—台北・樺山小学校の事例から」と題した研究報告を行い、論文を執筆した。代表者・林初梅は、台北第一高等女学校、台北第三高等女学校の卒業生への聴き取り調査で得られた知見を活かし、戦後学校の接収過程に伴う対日感情の変化について分析した。また、戦時中生まれ台湾人作家の描いた歴史小説とその改編ドラマについても論文を執筆した。論文では台湾人が持つ日本時代の集合的記憶の表象を捉え、さらにその作品創作の背後にある記憶生成の要因を分析した。

4. 研究成果

戦後国民党の対日政策との関わりの中で形成された文化的装置としての「日本」の実態を捉えるため、以下のように調査を行って研究を進めていた。2019年度まで二年間、台湾で戦後初期に行われた学校接収、日本人留用、官舎接収の三つの側面から広く資料を収集した。それと同時に、同窓会にも参加し、多くの台湾人と日本人引揚者にインタビューし、終戦前後の体験談を聞き取った。2020年度に入り、コロナ感染拡大の関係でインタビューを中断したものの、すでに入手した資料の分析及び音声データの文字化に着手した。さらにオンライン研究集会を開き、海外研究協力者との共同研究を行った。本研究で得られた成果は下記の通りである。

（1）オーラルヒストリーの採集成果と情報公開

オーラルヒストリーの採集成果としては、劉正雄氏（嘉義農林学校出身、文字化進行中）、鄭端容氏（戦後の台北市立女子師範学院出身）、川平朝清氏（台北高等学校出身、文字化進行中）、范碧蓮氏（台北第三高等女学校出身）、温理仁氏（旧制台北高等学校を継承した台北高級中学の卒業生）、伏木妙子氏（聖心女子大学シスター、戦後台湾で布教活動）があり、公開に向けて作業中である。

さらに『オーラルヒストリー—私の台湾探訪体験を中心に』という聞き取り採集の経験も執筆し、刊行している。研究成果の公開だけでなく、積極的にオーラルヒストリーの経験を広く共有できるようにしている。

(2) 国際研究集会の開催

そして社会への発信及び関連研究の相互理解を目的として2020年8月から2020年12月は、台湾、日本、ドイツから研究者を招き、オンライン研究会を開催した。計5回の国際研究集会の詳細は以下の通りである（敬称略）。

- ・2020年8月29日 日本時間14時～17時に開催
- ・李衣雲 戦時体制与台湾的「百貨公司」（戦時体制と台湾の「百貨店」）
- ・コメンテーター 所澤潤（立正大学教授）
- ・林初梅 現代台湾における家族史の語りとドラマ化—日本時代をめぐる集合的記憶の再形成
- ・コメンテーター 陳柔縉（作家、台湾大学新聞研究所兼任副教授）

2020年9月26日（土曜日）日本時間14時～16時に開催

- ・Thilo Diefenbach（蒋永学） 黄得時先生戦後対日本文化与日語的態度（黄得時の戦後—日本文化と日本語をめぐって）
- ・コメンテーター 垂水千恵（横浜国立大学教授）

2020年10月24日（土曜日）日本時間14時～16時に開催

- ・岡野翔太 在日台湾人における「日本統治」と「外国人」化の経験—一九六〇年代の戦没台湾人慰霊事業が示したもの
- ・コメンテーター 楊子震（南台科技大学助理教授）

2020年11月21日（土曜日）日本時間14時～17時に開催

- ・周俊宇 戦後台湾における「台湾人論」
- ・コメンテーター 黄英哲（愛知大学教授）
- ・石井清輝 植民地同窓会における戦後日本の台湾記憶—台北・樺山小学校の事例から
- ・コメンテーター 植野弘子（東洋大学アジア文化研究所客員研究員）

2020年12月12日（土曜日）日本時間14時～17時に開催

- ・王耀徳、林容慧 戦後台湾女性妝扮文化的「日本像」（戦後台湾女性のよそおい文化にみる「日本像」）
- ・コメンテーター：李衣雲（政治大学台湾史研究所副教授）
- ・所澤潤 台北高校の戦後
- ・コメンテーター 石井清輝（高崎経済大学准教授）

(3) 学術図書の公刊

上記計五回に及んだ研究会の報告内容は多岐にわたったが、日本時代をめぐる台湾人の集合的記憶の生成・保持・変化という問題に取り組んでいる点で共通している。最終的に研究報告の大部分は『二つの時代を生きた台湾—言語・文化の相克と日本の残照』（三元社、2021）の収録論文になり、コメンテーター及び参加者から得られた知見も反映されている。



同書は以下のように構成されている。

- ・第1章 戦時体制下台湾の「デパート」—全体主義と個人の軋轢（李衣雲／所澤潤訳）
- ・第2章 戦後台湾女性のよそおい文化—社会現象としての日本嗜好（王耀徳＋林容慧／阿部由里香訳）
- ・第3章 台北高等学校の戦後—日本が過去になった時に起こったこと（所澤潤）

- ・第4章 台北帝国大学の接収と延平学院の設立—省籍問題を伴う台湾本省人の対日感情の変化（林初梅）
- ・第5章 黄得時による日本文化ならびに日本語に対する戦後の態度（Thilo Diefenbach（蔣永学）／中村加代子訳）
- ・第6章 植民地の記憶—鍾理和「原郷人」の広がり（今泉秀人）
- ・第7章 華僑から「台湾人」へ——一九六〇—七〇年代在日台湾人の歴史的自己省察の試み（岡野翔太（葉翔太））
- ・第8章 植民地同窓会における戦後日本の台湾記憶—台北市・樺山小学校の事例から（石井清輝）

（4）本研究によって得られた知見

同書で示されているように、日本的なものは様々な姿で台湾の戦後史に現れていた。八篇の論文のいずれも、日本時代から戦後へ、その中で社会構造の変・不変により、戦後台湾においては、国民党の政策との兼ね合いの中で「日本」が再編されていったことを捉えている。そして以下の知見を得ることができた。

- ① 学校体制の転換に接した台湾人エリートたちの対日感情を変化させた要因、日本人との関係の再構築に向かった背景を明らかにしたこと。

台北高等学校の校舎は現在、台湾師範大学となっているが、1945～1949年の一時期は台北高級中学へと改組され、存続していた。所澤潤の研究によれば、台北高校及び台北高級中学の歴史研究は、これまでの断片的な記憶の収集の段階から、総合的な学校像を形成する段階に入りつつある。そのような当時の在校生の経験は、後に台湾の日本記憶の基層に入り込んだ可能性があり、台湾人の戦後の多くの体験は、その基層の上に記憶として積み重ねられることになった。

一方、台北帝国大学の戦後処理と私立延平学院の成立を通して国民党政府の対日政策を分析した林初梅は以下のように指摘している。日本敗戦後、国民党政府は、日本人の留用という形で表向きは日本的要素を一部容認しつつ、本省人が有する文化資本（日本語能力など）の価値については認めないという姿勢を貫いた。国民党政府の対日政策には、日本的要素の容認と排除という矛盾した両面があり、それが台湾人の対日感情に大きな影響をもたらし、また彼らと日本人教員、日本人同窓との関係の再構築をも促したのである。

- ② 文筆家・作家の創作言語の転換過程、植民地記憶の形成及び対日観の特徴を明らかにしたこと。

研究協力者のThilo Diefenbach（蔣永学）は文筆家・黄得時の戦前と戦後の著作を通して、日本文化が彼にとってどのような意義を有していたのかを明らかにしている。研究協力者の今泉秀人は、作家鍾理和の自伝的小説『原郷人』を中心に据え、台湾文学における創作言語の問題と「植民地記憶」を紐解いている。両論文によれば、戦後初期の台湾では、国民党政府によって急速に中国語化が進められ、多くの台湾籍の書き手が日本語からの言語転換を強いられ、苦悩するが、黄得時と鍾理和は、ほぼ完全な中国語を身につけていたため、ある種特別な存在であった。とはいえ、戦後初期の黄得時は日本に関する文章を発表せずにいた。また鍾理和の『原郷人』にもある種の空白の部分が存在している。黄得時と鍾理和の戦後体験から、当時の台湾人は、日本時代という過去を背負いながら戦後を生き抜かなければならず、そこに言語・文化の相克が避けがたく発生していたことが読み取れる。そして、戦前、戦後と続いた言語統制下に生きた人々の思想や心情をいかに読み解いていけるのか、という問題を改めて提起するものであるともいえよう。

- ③ 戦後台湾の経済復興の遅れ、また言語・文化の転換の困難さが、台湾人の対日評価の見直しを促したこと。

研究協力者の李衣雲、王耀徳、林容慧の研究から、台湾では一九四五年を境として「戦後」が始まったわけではなく、「戦時」が継続していった側面があることが分かる。それにより、戦後の日本社会では、経済復興の中でデパートが消費の殿堂としての地位を確立していったのに対し、台湾においては政府の各種の禁止令により、消費行動が徹底的に抑圧され、経済の復興が遅れることになった。しかし「日本」は、慣習行動としてすでに日常的に、普遍的に人々の生活に深く根付いていた。そうした経済統制の中でも、貿易統制が継続する下での密輸入、担ぎ屋などの裏チャンネルが存在し、人々の日本嗜好への欲望を満たすために機能していた。戦後台湾女性のよそおい文化に表れた「日本」、それは単なる外的な表象や消費の対象だけではなく、内的に意識され、記憶として歴史的に生成・存続・変容されていた側面もある。社会現象としての日本嗜好は、文化的装置として様々な機能しながらも、戦後台

湾に中国やアメリカから流入した文化と融合して独自の文化を形成していったと捉えられる。

④ 植民地同窓会の集団としての特質及び学校記憶が持続するプロセスを明らかにしたこと。

樺山小学校を研究対象にした石井清輝の分析によれば、台湾の植民地同窓会と他の旧植民地との最大の違いは、台湾人同窓生の積極的な関与にある。そのため、同窓会は、台湾についての新たな知見の獲得を促し、自分たちの経験の相対化や新たな台湾認識をもたらす契機ともなっていた。一方で、植民地の学校同窓会は、植民地時代の記憶に対するノスタルジアを共有できる者たちが、そのノスタルジアの充足を大きな目的として参加するのであり、さらにその集合的記憶とノスタルジアの共有がネットワークを構築、強化していくという、ノスタルジアとネットワークが相互に循環的に強化されていく構造を有しているのである。そのため、このような同窓会のあり方に同調できない有資格者は参加せず、再構築された同質的な記憶とノスタルジアの感情が主流になり、それ以外の記憶や感情が排除される傾向を生み出していく。従って、少数派の台湾人同窓生の異質な記憶や植民地統治への批判的な認識は、植民地同窓会という集団の特性からしても、最終的には集団の「共有体験」を軸にしたノスタルジアの語りへと回収されていかざるを得なかった。台湾の同窓会の記憶研究においては、以上のような集団としての機能、特性を踏まえた分析が求められているといえよう。

このように戦後台湾における日本的要素の残存現象及び「日本」記憶の再形成過程については、様々な角度から、分析、解明がなされているといえよう。そうした集合的記憶の形成過程があったため、台湾における日本時代の記憶は、戦後政策、そして戦後社会の構造変化を背景に更新され、相対化された側面があり、次第に1990年以降の台湾社会へと浸透していった。日本統治時代をめぐる記憶の語りが顕在化されるようになったのは民主化後の1990年代以降だが、戦後初期の経験と深い関係があると考えられる。

本研究プロジェクトは、以上のように共同研究を行い、そして共同編集の作業を経て新たな知見が多数得られた。また、書籍の刊行により、研究成果を発信し日本社会に還元するとともに、学術分野への貢献ができたものと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 所澤潤	4. 巻 20
2. 論文標題 オーラルヒストリー 私の台湾探訪体験を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 台湾口述歴史研究	6. 最初と最後の頁 3-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 所澤潤	4. 巻 なし
2. 論文標題 台湾の中の日本語世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二つの時代を生きた台湾 言語・文化の相克と日本の残照	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井清輝	4. 巻 なし
2. 論文標題 多元社会台湾の歴史的積層	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二つの時代を生きた台湾 言語・文化の相克と日本の残照	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 所澤潤	4. 巻 なし
2. 論文標題 台北高等学校の戦後 日本が過去になった時に起こったこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二つの時代を生きた台湾 言語・文化の相克と日本の残照	6. 最初と最後の頁 84-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林初梅	4. 巻 なし
2. 論文標題 台北帝国大学の接収と延平学院の設立 省籍問題を伴う台湾本省人の対日感情の変化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二つの時代を生きた台湾 言語・文化の相克と日本の残照	6. 最初と最後の頁 125-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井清輝	4. 巻 なし
2. 論文標題 植民地同窓会における戦後日本の台湾記憶 台北市・樺山小学校の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二つの時代を生きた台湾 言語・文化の相克と日本の残照	6. 最初と最後の頁 240-269
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 初梅	4. 巻 47
2. 論文標題 歴史小説とその改編ドラマにみる「日本」記憶の語り：台湾人三作家が描いた家族史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 123～143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/79328	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 所澤潤	4. 巻 なし
2. 論文標題 台北高等学校と台湾の民主化 辜振甫の姿をとおして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民主化に挑んだ台湾－台湾性・日本性・中国性の競合と共生	6. 最初と最後の頁 33-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林初梅	4. 巻 なし
2. 論文標題 台湾華語の現在と行方 台湾人アイデンティティの一要素としての可能性を探る	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民主化に挑んだ台湾－台湾性・日本性・中国性の競合と共生	6. 最初と最後の頁 278-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林初梅	4. 巻 10
2. 論文標題 国語と母語のはざま：多言語社会台湾におけるアイデンティティの葛藤	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LANGUAGE AND LINGUISTICS IN OCEANIA	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 所澤潤	4. 巻 解散記念号
2. 論文標題 台湾教育史研究会第100回と解散に寄せて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 台湾教育史研究会通讯	6. 最初と最後の頁 42 - 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 林初梅
2. 発表標題 現代台湾における家族史の語りとドラマ化 日本時代をめぐる集合的記憶の再形成
3. 学会等名 第6回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」研究会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井清輝
2. 発表標題 植民地同窓会における戦後日本の台湾記憶 台北・樺山小学校の事例から
3. 学会等名 第9回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」研究会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 所澤潤
2. 発表標題 台北高校の戦後
3. 学会等名 第10回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」研究会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林初梅
2. 発表標題 家族史の書籍化と映像化に注目して--戦後世代の台湾人による日本時代の記憶の構築とイメージの転化
3. 学会等名 国立政治大学台湾史研究所（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林初梅
2. 発表標題 台北帝国大学・台湾大学・延平大学 戦後初期台湾の大学接収・成立をめぐって
3. 学会等名 九州大学韓国研究センター創基20年記念国際学術ワークショップ「近現代の東アジア社会における「学歴/学校歴」の位相」（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 林初梅、所澤潤、石井清輝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 279
3. 書名 二つの時代を生きる台湾 言語・文化の相克と日本の残照	

1. 著者名 林初梅、黄英哲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風媒社	5. 総ページ数 310
3. 書名 民主化に挑んだ台湾－台湾性・日本性・中国性の競合と共生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	所澤 潤 (SHOZAWA JUN) (00235722)	立正大学・心理学部・教授 (32687)	
研究分担者	石井 清輝 (ISHI KIYOTERU) (30555206)	高崎経済大学・地域政策学部・准教授 (22301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計5件

国際研究集会 第6回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」国際研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第7回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」国際研究会	開催年 2020年～2020年

国際研究集会 第8回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」国際研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第9回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」国際研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第10回「現代台湾における植民地記憶の語りに関する研究」国際研究会	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	台湾・国立政治大学台湾史研究所	台湾・嘉南薬理大学	台湾・台南応用科技大学	
ドイツ	東亜文学雑誌			